科目区分：専修別専門教育科目（美術）／芸術文化課程　造形芸術コース
授業科目名：日本美術史

地域における美術作品を通じて、日本美術史を学ぶ

美術教育専修　上原真依

Ⅰ．授業の概要

「日本美術史」は、学校教育教員養成課程2・3年生および芸術文化課程の3年生を対象とした、美術中等免許（一種・二種）のための必修科目である。本年は、学校教育教員養成課程8名（2年生3名、3年生2名、4年生3名）、特別支援教育教員養成課程3名（いずれも3年生）、造形芸術コース9名および音楽文化コース2名（いずれも3年生）の計22名が受講した。例年と異なる時間割枠（木3）になったことも手伝い、ここ数年では最も多い受講者数になった。

1)　授業目的

・仏教美術を概観し、その特色を理解する。
・時代ごとの文化背景を踏まえて、造形表現との関連性を考察する。

2)　到達目標

・日本の美術作品を的確に視る能力を高める。
・日本美術の基本的な流れを掴み、各時代・流派の様式を理解する。
・作品の機能や制作当時の社会的・文化的背景など、観賞教育に必要な基礎的知識を獲得し、美術作品を歴史的背景との関連性から考察する術を身につける。

3)　関連するディプロマ・ポリシー

造形芸術全般にわたる確かな知識と，得意とする分野における高度な専門的知識を修得している。（知識・理解）
造形活動などの自己探求を継続する中で課題を明確にして，主体的・自律的な学習ができる。（関心・意欲）

4)　今年度、特に意識して取り組んだこと

美術作品を正しく理解するには、まず本物を実際に見ることが重要である。しかし、首都圏や関西と異なり、愛媛県下では仏教美術に接する機会も限られている。

作品を実見することは、作品の面白さに気づき、作品を積極的に読み取る姿勢を育む基本である。実物を見て作品について考え調べる習慣を獲得すれば、授業時間外のみならず生涯にわたり美術作品を学習し続けられることは言うまでもない。そこで本授業では、実作品を見ることへの関心を高めることを意識し、見学の機会を設けることとした。特に2017年度は、美術史に初めて触れる美術専攻以外の受講生も多かったことから、できるだけ楽しみながら仏教美術を学べる場として、生口島（広島県）の耕三寺を選出した。耕三寺美術館にある快慶作の《宝冠阿弥陀如来坐像》を見学するのはもちろん、耕三寺敷地内には、全国の有名建築の模造や仏像の模像が散在しているため、オリジナルの建築や仏像を当てながら敷地内を散策できると考えたからである。

5) 授業方法、形態、内容の概要

本授業は先述した取り組みを踏まえ、①教室で作品実見に役立つ仏教美術の基礎知識を学習すると同時に、②生口島の耕三寺（広島県尾道市瀬戸田町瀬戸田）の見学実習を行った。

①仏教美術入門編と代表作例

見学実習で実見する宝冠阿弥陀如来坐像は鎌倉時代の代表的仏師快慶の作品であるが、その特徴および技法を正しく理解するためには、仏教美術に関する基礎知識と日本における仏像の変遷を学ぶ必要がある。そこで、仏の種類（如来・菩薩・明王・天）ごとの特徴を紹介しながら、仏像の技法、代表作例を紹介した。

②生口島の耕三寺（広島県尾道市瀬戸田町瀬戸田）の見学実習

見学のメインとなるのは、耕三寺ミュージアムが所蔵する平安～鎌倉時代の10体ほどの仏像である。特に《宝冠阿弥陀如来坐像》（重要文化財）は、快慶作品には珍しい関東の寺社のために制作された作品であり、四国においては珍しい残存状態も良好な鎌倉時代の作例であるため、この機会を最大限に活かすべく秋に下見をして準備を進めた。また耕三寺はミュージアム以外にも仏教思想を反映した作品が敷地内にちりばめられており、授業で取り上げた仏教美術の復習の場にぴったりである。そのため、ミュージアム見学後は自由に敷地内を見て回り、仏教美術を自分で探しながら体験できるように配慮した。見学日については第1回にアンケート

を行い、受講生の都合を聞いたうえで、12 月 16 日（土）に実施した。（なお、積雪など天候の心配から、1 月の実施は候補から外した）。耕三寺までの往復には報告者が手配した大型バスを利用した。また、日本美術史以外にも、工芸概説の受講者および造形芸術コースの有志からも参加者を募り、計 33 名でバスを利用したため、一人 4000 円（往復交通費・入館料）と費用を安く抑えることが可能になった。

Ⅱ．アンケート結果

アンケートは、耕三寺への見学実習のワークシートにて感想を中心に記述するもので、22 名が回答した。その回答をいくつか紹介する。

[耕三寺見学実習について]（自由記述）

・自由に耕三寺の中を見て回れてよかった（5 名）
・まさに仏教のテーマパークだった（3 名）
・大きな門や仏像がこれでもかと詰め込まれていて楽しめた。
・授業で学んだ情報から、仏像の正体を探ることができて面白かった。
・日本の仏像の繊細な表現にビックリした。
・地獄めぐりは怖いけど分かりやすかった。
・お寺はもともと鮮やかな色だと聞いていたが、実際にカラフルに復元された色は見ごたえがあった。
・未来心の丘の大理石にはキョトンとなってしまった
・昔の私なら仏像で一括りにしていたので、違いを考えることが出来るようになったのは少し進歩したと、今回の実習で感じた。
・地獄めぐりの絵には、私たちが知っているような内容の絵もあったので、とても関心を持てました。
・仏像のオリジナルを見抜くのは難しかった。

Ⅲ．　総括

1）アンケート結果を踏まえた、次年度への改善点

今年度は受講生も多かったことから、すべての作品を一緒に回ることは不可能と判断し、ミュージアムでの解説・見学の後は、各自で敷地内を探索しながら仏教美術との関わりを考察してもらう実習構成にした。ワークシートにいくつかのヒントを掲載していたこともあって、積極的に摸像からオリジナルを探ろうとしていた学生も多かった。ただし、ヒントが少なく、その場に回答もないことから難易度が高すぎるという声もあった。今後はもう少しヒントを細かく出すワークシートの工夫も必要であろう。また、例年第 1 回の授業時に見学実習日を決めるアンケートを実施しているが、特別支援教育の学生は教育実習中のために別途メールで回答をお願いする必要があった。授業開始後にアンケートを取ると開催まで余裕が無いことから、今後は授業開始前の事前アンケートの導入を検討したい。

2）授業の目的、到達目標、関連 DP を踏まえた総括

アンケートおよび見学実習に関する取り組み方から、授業の目的や関連 DP の（知識・理解）（思考・判断）はほぼ達成できていると考える。特に実物を見て思考する楽しさに気づき、美術作品への関心を高められた学生は多かった。今後は作品を実際に見る機会を自ら設定し、楽しみを見つけられるような取り組みを考えたい。

3）地域を核とした教育と研究のつながり

報告者の専門はルネサンス期の西洋美術史であり、特に 15 世紀のイタリア・マルケ地方において祭壇画がどのような社会でどう受容されていたかを研究している。美術館で「作品」として観ると忘れがちだが、美術作品と作品が受容された社会を切り離すことはできない。これは日本美術史の作品においても同様である。本年度は耕三寺を見学したが、有名建築を摸した建物から建立者の耕三寺耕三の母への思いを感じ取ったり、人々が込めた願いを仏像から読み取ろうとした学生も多く、美術作品と社会の繋がりを実感しやすかったように思う。まさに地域における作品とその受容のあり方を核とすることで、学生も作品をより身近なものとして考察することができた。今後もこうした地域の作品見学を活用した授業を、実施していきたい。